●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 34

34th Letter

高蔵遺跡伝説

伝説そぞろ歩き

遺跡掘り
箒木掃くよに
繊細に
古きを温ね
新しき知る

弥生時代後期の遺物を出土
古墳時代後期の円墳も発見

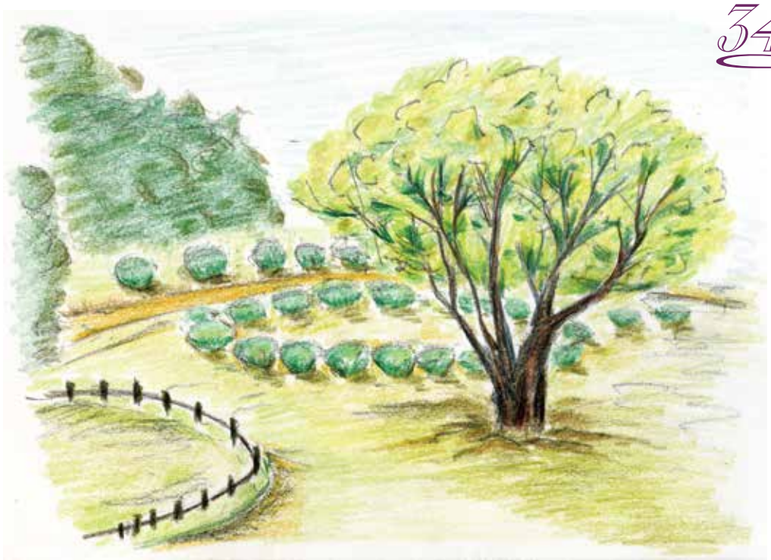
沢上から外土居、高蔵にかけての標高10mの熱田台地上にある一帯は、古くから高蔵貝塚として知られていましたが、1907年（明治40年）、大津町線道路拡張工事の際に、溝状遺構が発見され、翌1908年（明治41年）に鍵谷徳三郎が本格的な調査を実施したところ、円窓付やパレス式を含む弥生式土器・石器のほか、彫刻のある馬骨、馬の歯などが出土され、「高蔵遺跡」として考古学界から一躍脚光を浴びることとなりました。

高蔵遺跡は、弥生時代後期、つまり2世紀から3世紀にかけての遺跡といわれています。土器は明るい橙色を呈し、脚付、台付の器形で、装飾はすべて機械的な回転による櫛描きの波状文、点列文に限られるなど、尾張弥生式の新様式を表しています。なかでも彩文土器はこれを代表する出土品です。

この遺跡からは多くの遺物が出土しているにもかかわらず、住居跡はまったく発見されておらず、集落の様子は分かっていません。

さらに、高蔵遺跡群内にある高座結御子（たかくらむすびみこ）神社の境内に、直径約15mの円墳が4個あります。1954年（昭和29年）には名古屋大学によってさらに1個が発掘されました。この古墳には高蔵一号墳と命名され、古墳は直径18m、高さ2mの規模。古墳時代後期、つまり6世紀末のものといわれています。この時代は前方後円墳はほとんど消え去って、円墳の時代に入っていました。石室は30cm大の丸い川原石を組み上げ、三味線銅型と呼ばれる銅ぶくれした形に造られていて、石室が2個連続、その前に短い羨道（せんどう）があります。石室の規模は2個とも長さ3m、幅1.5m、高さ2.3mで、床に平たい石が敷きつめられていて、石室の中に5体分の人骨と直刀、金環、須恵器（すえき）（壺・高杯）が納められていました。なお、高蔵遺跡は、今は一帯が高蔵公園として整備されています。

▲ 今は高蔵公園として整備されている高蔵遺跡。



シュリーマンの遺志を継ぎ
エバンスがクノッソス宮殿発掘

遺跡といえば、クレタ島で発掘された遺跡、クノッソス宮殿は、ギリシャ神話に登場する迷宮・ラビリンスであるというのが定説です。そこで、2回シリーズでクノッソス宮殿について特集します。

クノッソス宮殿の最初の建造は、紀元前2000～1700年頃と推定され、地震や津波などの自然災害により崩壊後、紀元前1700年頃に一層規模を拡大して新宮殿が建てられました。ギリシャ神話に登場するクレタの王・ミノスが居城していたのが、この新宮殿といわれています。

現存する遺跡は大部分がこの新宮殿のもので、この規模は東西170m、南北180mのほぼ正方形で、中庭は東西60m、南北29mとなっています。起伏する丘の上につながる多数の室、屈折を繰り返す廊下、至る所に存在する開口部の内空間など、この宮殿の実態はまさに「迷宮」の名に相応しいものです。

この宮殿の発掘を行ったのは、イギリスの考古学者、アーサー・エバンスです。この地域はすでに何人かの学者が注目していて、トロイア遺跡を発見した、かのシュリーマンも発掘をめざして土地の買収寸前までいっていました。シュリーマンが1890年に志半ばで亡くなると、エバンスは彼の遺志を継いで1900年、ここに最初の鍬を入れ、幸運にも作業開始数日で、王座室などの宮殿の主要構築に達します。つまり、宮殿は地表からわずかの深さの箇所に眠っていたのです。王座室のアラバスター製の椅子の最上部まで、数cmしかなかったと伝えられています。

この後、エバンスはひたすらにクノッソス宮殿の発掘に専念し、毎年成果を挙げていきました。1921年には『クノッソスにおけるミノスの宮殿』第1巻が発刊され、その後数十年にわたって刊行が続き、1936年に完成しました。それは、詳細な発掘報告書であり、同時に確信に満ちた学説の提示でもありました。

フィクションと考えられていた神話の世界が実在していたという歴史ロマン。その痕跡を現地に行って真近で確かめてみたいものです。

※次回は大高城伝説について特集します。お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K
■ イラスト／Rei
■ 取材・文／Icarus